

トイレに考える

平戸 幹夫

数多の外国旅行の体験談の中で、食の方は多くの方が好んで話題にするし、聞く側にも楽しいものである。ところが食べれば必ず出てこなければならない排泄の方は余り好んで取り上げる訳にはいかない。しかし多少の軽蔑は覚悟して、近況ではないし、随筆にもならないが、ここで少し申し述べておくと、多年の咽喉のつかえがおりる。

私が初めてマレーシアの農村に滞在したときのことだから、もう10年以上前のことになる。入植農家に世話になったのだが、数日のうちにトイレットペーパーがきれてしまって困っていた。遂に意を決してノルディンさんに事情を訴えてみると、案ずるより産むがやすしで、そんなことならやってみたらいい、との御託宣であった。

翌朝のことである。右前方に水瓶がおいてあって、その中に椰子の半分に割った殻が浮いている。そのお碗のような椰子の殻の真ん中に小さな穴が開いている。仕掛けはしごく簡単であるが、問題はどんな風に使うかである。水瓶は右側にあるから右手で水を汲むのが自然である。とすれば、その水を左手で受けて洗うのが自然だろう。確か左手は不浄の手で、トイレには左手を用いるという。とすればこれで正解であろうと、右手で水を汲んだのだが、水は底の穴からどんどんこぼれてしまう。穴を今度は右手の指で押さえてみる。今度はこぼれない。そっと水を手元に寄せてみる。穴から指を外すと水がうまい具合に出てくる。この水を左手に受ける。最初は何杯も何杯も水を汲んだ。慣れるにしたがって水の量は減っていった。毎日の修練だからすぐに上達する。ごく自然な成り行きで、それからは水を使うときは左手を用いることになった。

尿尿に関する研究では、柴田徳衛先生の「日本の清掃問題——ゴミと便所の経済学」が名著だと思う。柴田徳衛先生には大学院で教わったとき、実地見学で尿尿処理施設や尿尿投棄船など普段なかなかお目にかかれぬものを見せていただいた。先生の名著では、生産物の行方や、その際の姿勢については古今東西に涉って蘊蓄を傾けている。

1973年の第1次石油ショックの時には、日本ではトイレットペーパー騒ぎがあった。10年後には、逆に石油価格が暴落する逆オイル・ショックが世界を襲った。丁度その直後に訪れたある産油国の開発プロジェクトの現場で、再びトイレット・ペーパー騒動に遭遇した。

外国からの輸入に対する外貨割り当てが厳しくなると不要不急のもの、優先順位の低いものには外貨がまわらなくなり、当地の人々には全く不要の物であるトイレットペーパーは輸入不可能となり、たちまち店頭から姿を消してしまった。そこで日本人のなかでパニックがおきる。日本からやってくる人たちにトイレットペーパーを頼む。一時休暇で、国外に出る人は帰りには旅行鞆一杯にトイレットペーパーをつめこんで現場に戻る。そんな笑うに笑えない深刻な悩みを聞いて、私はいとも気やすくしかも至極真面目に「水を使えばいいでしょう」といった。一瞬の沈黙と名状しがたい気まずい雰囲気。健気を守る日本人の誇りにふれたようであった。

インドの早暁は美しい。デリーの秋から冬の時期に朝霧の中を散策すると遠景に人々が其処此処に佇むさまが美しいシルエットを作る。仔細に観察すると静かに座る姿の多いことに気付く。トイレの無い家が多く、人々は朝の用足しに外に出ているのであって朝の散歩とは些か趣が違ふ。彼らは水を入れた瓶やかんを携えて目指すところに向かって、水で後始末をする。インドが豊かになったら世界の森林が消滅するという戯言があるという。今はインドの人々は水を使っているが、豊かになれば紙を使うようになる。そうなると何しろ6億もの人口だから、紙の消費量は膨大になって、原料のパルプは大量に消費され、そのもとになる森林は早晚枯渇することになる。という論法である。

この論法には決定的な誤りがあると私は思っている。紙の方が進んでいるという思い込み（思い上がり）である。百聞は一見に如かず、馬には乗ってみよで、彼らと同じ流儀の経験をしたことのある人にとってはその誤りは自明のことである。

(拓殖大学)